

大阪 ■ ■

No.29 2004. 7.24.

大阪哲学学校運営委員会 Copyright©, 2004

哲学学校

【郵便振替】01170-1-81313

【E-mail】contact@oisp.jp

【Home Page】http://oisp.jp/

【Net Forum】準備中

【代表者】山本 晴義(校長)

【発行者】平等 文博(運営委員長)

【編集者】平等 文博

■ ■ 通信

ある夜の夢から

前田 博之(会員)

こんな夢をみた。ある職場で私は仕事をしており、そこで知人たちと働いている。私が今働いている場所にはいない人たちばかりである。夢の中ではなぜか彼らが私の同僚となっている。上司の私たちに対する態度は厳しい。少しでもミスがあれば追い込まれる。そのミスとは、ほんの些細な、取るに足りないような事柄なのだが(それは身体統御法といってもいい)上司は目ざとくそれらをチェックして、ミスをした人間がきつい役回りをするように仕向けてくる。それはある意味、自然の摂理といってもいい。「ミステイク」とは、それらの公理系(コード)に沿わない言動のことなのだ。

私がこんな夢を見たのは、最近集中的に阿部公房の抽象小説を読んだからかもしれない。彼の小説世界ではどんな荒唐無稽な事象でも起こりうる。しかし、それは作者の気まぐれでは決してなく、その天才的数学の才能から導き出された抽象的に、論理的なある法則に則って起こる現象なのである。例えば「壁」。それは人間世界を拘束する公理規則、その象徴として出現する。それは決して乗り越えられず、その中へ我々

人間は最終的に吸収されてしまう。

公理系(コード)と書けば、ドゥルーズ&ガタリの事が思い浮かぶ。彼らも、ラカンも我々人間の日常生活の上だか下だかに潜む、象徴的な世界、無意識の世界を解明し、理論化した。それは構造主義/ポスト構造主義の偉大な成果である。しかし、これは私の見方だが、それらは結局のところコードを強化し、システムをより困難複雑で我々を過度に縛り付けるように作用してしまっているのではないか。彼らの主張は、あくまで「コードを壊して、その奥に潜むメッセージを探せ」ということだったはずである。

レヴェルの低い話かもしれないが、この世間には本音と建前がある。学校で私たちは「朝友達に会えば挨拶をしよう」と教えられる。だが、実社会に出て働きに出ると、挨拶は自分の上司にだけするべきものであり、それ以外の人間にはする必要が無い。してはいけないのだ。上司の前で、他の同僚と口をきくこと、それは最高に「失礼」な事であるらしい。そして、仕事には失敗がつきものである。だが、決して「すいません」とは言うてはいけない。学校で教えら

れていることとは全く逆である。「次から気をつけます」と一言いえばいい、とはいうが、その言葉を口にすると、今度は次に失敗した時には「もう失敗しないと言ったではないか」と追込まれる。さらに、「……だと思えます」と言ってはいけない。「……します」と言えといわれる。必ずそれをせよ、言った以上実行せよとの命令である。そんな事を言っていれば、本に書かれている文章などどうなるのだ。「……だと思う」は常套句である。作者が文章にしたことなど絵空事ということになる。必ず実行せよというなら、それは三島由紀夫と同じである。

私は神経科の病院に通っているし、仕事もアルバイトしかできない。就職失敗組である。だが「働きたい」という意欲は持っている。その願望が、前述した不思議な夢をみさせ、私を「働きたい」しかし「職場のルールが恐ろしい」という二重拘束のもとに置いている。私が書いたような職場でのルールについて書かれた書物など皆無である。わずかに、テーブルや座敷に座る時の席順などについての説明があるだけである。それらは、語る事がタブーとされ、誰もが知っているが、決して語ってはいけない「常識」とされている。だが、職場で言いたい事も言えず、身じろぎもせずじっと黙っていることが、どんなに苦痛であることか。職場も人間関係醸成の重要な場所である。笑いや馬鹿話が人間関係の構築に重要であることは確かであり、また必要な連絡事項、説明責任上話さねばならないこともある。それなのに、口もきけない。誰がこんなルールをつくったのだ。

私の今夜の不思議な悪夢がこのペンをとらさ

ずにはいられなくした。私はタブーを書いたのかもしれないが、今の日本社会のフリーター、引きこもり化をみていると、私のように考えている人が少なくないと思えて仕方が無いのである。私たちに必要なのは連帯であり、私たちを不当に拘束するタブー、システムを攻撃することだと思ふのだ。ジャーナリズムにはどうやら期待できそうもない。彼らの職場こそ、タブー(放送コード)の塊のような場所であり、新人記者は仕事(つまり文章の書き方)も教えてもらえない。それらは仕事を通して自分で身につけていくしかないものだからである。しかし、私は職場で仕事の稚拙さから殴られたことがあるが、同様の事件は数限りなく起こっているはずである。新聞やテレビもそうしたネタは沢山抱えているに違いない。一つ事件が起これば同様な事件の報道が続く。それらはジャーナリズムの選択であり、彼らはそうしたネタをいつでも出せるように準備しているだけで、それが似た事件が頻発しているように我々に見えるだけなのである。『帝国』を書いたアントニオ・ネグリはインタビューで哲学は「優勢思想」で、そうしたタブーは書かないと答えているが、私は現代の真の哲学は、人間を解放するために必要だと思っている。だから、こうした些細ではあるが暴力的な事象についても批評を加えていくべきだと思う。その思いが私にこの文章を書かせた。私は私と同様のことについて考えている人たちとの邂逅を期待する。ご意見・ご批判がありがたい方は、hiro-maeda@msa.biglobe.ne.jpまでお願いします。拙文を読んで戴いてありがとうございました。

～夏期合宿のご案内～

恒例になりました夏期合宿(大阪唯物論研究会哲学部会、『季報・唯物論研究』刊行会と共催)を、今年も下記のように予定しています。共催団体の会員・定期購読者の皆さまには追って案内を差し上げます。オープンな合宿ですので、会員外で参加ご希望の方はぜひお問い合わせください。

●8月28日(土)～29日(日) ●ウオジ苑(阪急河原町徒歩) ●参加費1万2千円(予定)

「人間観の転換」への疑問に答える

やすい ゆたか（会員）

その1、実存主義的人間論と人間観の転換

たとへ身は はかなき露と消ゆるとも
遺せし文化に 命燃ゆるや

先日藤田友治さんから、実存主義的な人間観の問題意識とやすいさんの「人間観の転換」は噛み合わないのではないかという質問を受けましたので、同様の疑問を感じておられる方も多いと考え、ここで少し触れておきます。

実存主義は、人間の有限性や一回きりの実存を問題にします。個体としての有限性、死の問題です。もう我々も還暦に近づき決して他人事ではありません。これはアポロン神殿の「汝自身を知れ」という呼びかけが、不死なる神が死すべき運命の人間に対してなされたものであることを思う時、「死に向かう存在」としての人間理解が、もっとも哲学的にも根源的であることを意味します

個体的身体としては有限であるからこそ、死すべき運命を背負っているからこそ、人間は個体的身体のみで自己を限定することはできないのです。みずからの自己実現活動によって、自己自身を環境的自然や社会的諸事物の中に表現し、見出していくことに充実と喜びを感じる事ができるわけです。

個体的身体ははかなく滅び去ったとしても、その人の記憶は周囲の人々の中に残りますし、その仕事は受け継がれます。現代の文化の中に過去の人々の営みが織り込まれて生き残っているわけです。もちろん文化は身体的諸個人の行動様式にも保存されますが、有形無形の文化財や社会的諸事物、環境的自然の中に保存されて

いるわけです。

ですからそれらを人間に含めるという人間観の転換は、身体的諸個人の有限性、一回性という実存主義的人間観の問題意識を踏まえた上で、だからこそ人間は自己を身体的な枠を超えて、社会的諸事物や環境的自然の中に見出さざるを得ないと主張しているのです。つまり実存主義的人間観は、私の提起している人間観の転換へと脱皮せざるを得ない限界を持っているのです。

その2、人間観の転換と感覚の革命

崩れゆく 高層ビルの姿こそ
人間の今、断末魔かな

「人間観の転換」に対して、事物も含む人間観へ転換しようというけれど、ビルや車や森などを見て、それを人間と見ることは到底無理ではないかという疑問が出されます。つまり身体的個人を人間と見なしてきたので、携帯電話やシューズは人間に見えないというわけです。それでは全く自分勝手な机上の空論に過ぎないという批判です。

天照大神と鏡と巫女が全く別物にも関わらず一つだという論理があって、これが信仰されています。天日矛は矛ですが、新羅の王子です。草薙の剣とヤマトタケルもおそらく一体のように理解されていたでしょう。偶像崇拜の論理は、偶像とその本体は別物だというのは偶像崇拜批判の立場からであって、信仰している人々にとっては仏と仏像は一体のものです。円空はたかさんの円空仏をつくりました。我々には円空仏として円空という人物が現れるわけです。

窓にかかっている布はカーテンとして意識されますが、それは部屋という人間空間を構成するからです。人間を構成しているからそれぞれの事物は定在するわけです。これが携帯電話だというのは、これが人間のコミュニケーションを担っているからです。ということは、我々は人間を裸の身体としてみているわけではなく、衣服を含めて人間としてみているように、社会的諸事物を通して人間をみているわけです。我々は人間を語る時、核兵器や大量のゴミについて語っているわけです。つまり人間を見るということは決して身体的諸個人だけを見ることを意味していないのです。その事に気付いていないだけです。ですから「人間観の転換」の議論を通して、あなた方は、崩れ落ちる高層ビルやテレビ画像の日食のダイヤモンドリングにさえ人間を見るようになるのです。

その3、「二人称の死」と「人間観の転換」

亡父の書に 今も命は躍りたる

書こそ父の 命なりしか

「その1、実存主義的人間論と人間観の転換」に対して藤田さんから、私のいう死は一人称や三人称の死であり、かけがえのない人の死である「二人称の死」ではない。一人称の死は体験できないし、三人称の死は補填が効く、真に実存的なのは「二人称の死」であり「君が代」の元歌「我が君は 千代にましませ さざれ石の巖となりて 苔のむすまで」は「二人称の死」を歎く挽歌なのだという批判をいただきました。

一人称の死が体験できないという捉え方は、一面の真理ですが、弁証法的ではありません。生きるということは、死につつあることです。まさにこの刹那こそが死に直面し、死を体験しているわけです。実際、食べるということは動植物を殺し、生命を燃やしているのですから。他者の死が自己の生なのであり、それは自己の

死の過程です。

人間を個体的身体に限定している限り、二人称の死が体験できるというのも、思い上がりの面があります。いかにかけがえのない人の死であっても、それは自己の死の体験ではありえないのですから。二人称の死つまり「対象喪失」が自己自身にとって深い自己喪失であるのは、自己を対象を包括する関係に拡大しているからなのです。

二人称の死こそ、人間観の転換を強く求めるものです。三橋節子は自分の死を客観化し、二人称にしました。つまり夫や子供たちに絵として与えたのです。三橋節子が彼女の絵として存在しているということによって、彼女は二人称の死を生き続けているのです。

梅原猛の生母千代は二人称の死として、猛の苦悩と生きるための超人的エネルギーの源でした。彼は二人称の死を彼の作品に昇華し、物化しているわけです。私の父は極めて個性的な書を書きました。父の書は、今でも躍動していて、そこに父は生き続けています。

「二人称の死」の問題をどこまで「人間観の転換」の問題意識の中で捉え切れるのか、これは「大きな壁」かもしれません。しかしこの壁を越えれば「人間観の転換」は大いに説得力を増すのではないのでしょうか。

あくまで主体的、実践的なパトスの知を藤田さんは求めておられるのでしょうか。それで事物を人間に取り込むことを拒絶されるのではないのでしょうか。しかし岡本太郎は「芸術は爆発だ！」と叫びましたね。「物のパトス」という発想こそ求められているのです。

われわれはいかなる歴史幻想の罾にあるか

——大阪哲学学校での講演原稿

室伏 志畔（古代史研究者）

もう二年近く前になるわけですが、磐井の乱についての九州シンポジウムが開かれたとき、私はこのささやかなシンポジウムは、あのカオスの理論の蝶の羽ばたきと同じで、いつか竜巻となって現れるだろうと語りました。それは磐井の乱をこれまでの大和对九州の対立とすることなく、九州域内の王朝対立とする画期のものであったからです。それから二年近く立ち、私は『越境としての古代』を発売し、前後して「古代史最前線」が現れ、歴史研究は「主人持ち」でない研究誌を確立する中で、少し動き始めたかに見えます。

本日のお話は、いまだ大和中心史観の通説の中にあるみなさんにとっては、いささか戸惑う発表であるかと思いますが、私から見ればみなさんは左翼を誇っておられますが、それは所詮、天皇制の袋の中でのそれであって、天皇制思考の中に囲われ、同席している点では右翼とあまり代わり映えがないのです。少しみなさまのお怒りを喚起する中でその意味をおいおい話してまいりたいと思っております。つまり今日のお話は、通説の大和中心史観の枠組みを越えたところの展開なのだということをまずご理解願いたいただきたいと思うのです。それは七〇年代の古田武彦の大和朝廷に先在する九州王朝・倭国説の登場に始まり、九〇年代の大芝英雄の大和朝廷の前身としての豊前王朝の発見を踏まえてのさらなる展開としてあるわけで、今、古代史世界は見える人には恐ろしいまでのてんやわんやにあるのです。

それをまずご理解いただくために、私は少しカメラを後ろに引く巨視的な観点から、つまり

時間的には三千年くらいの射程と、空間的には列島全体というより、日本古代史を東アジアの民族移動史の一齣に解体する私の幻想史学の南船北馬説の線上に据えるところから外観し、本題に入っていきたいと思います。

《古代史の新しいパラダイム》

東アジアの南や北からこの列島に渡ってきた人々が重層的にクロスする中に原日本人は形成を見ましたが、いつしかそれがこの国の純正の大和民族が周囲に拡大する中で日本国は形成されたとする、逆転したねじれの中に通説としての古代史観は確立をみました。この詐術の中に天皇制はそそり立っているのです。私はやはりこの列島の王権論を、やはり原日本人の形成に重なるところに引き戻すところから話を始めたいと思っています。

昨年、放射性炭素C14の測定法により弥生時代の開始が五〇〇年近く溯り、BC八〇〇年ともBC一〇〇〇年と言われる時代となりました。この画期に春秋時代の開始（BC七七〇年）と殷の滅亡（一〇二七年）を見ると、弥生時代のこの新たな開始は東アジア、殊に中国の変動と無関係とは思えないのです。とするとBC三世紀からの弥生の集団稲作の盛行は、この時期の秦・漢による中国統一国家の形成と平行だということです。というのはこの統一によって長江下流の江南にあった呉越の民が国内外を放浪するという事態があったからです。私はこの中の呉越同舟した一団が黒潮に乗って対馬海流に分け入り、日本海側の九州、出雲、能登一帯に入り、集団稲作をもたらし、これらの地域での王権形成に入ったと考えています。つまり

この列島における国家形成は中国南方系倭人集団の渡来に始まったので、それは九州で委奴国（狗国）、出雲では八雲国、能登での越の国の形成となったのです。

ところでこの列島における稲作国家の胎動を羨望の目で見ていたのは、韓半島に下ってきた北方系騎馬民族王権で、彼らは対馬海流上の天国集団と結び、出雲や九州へ侵入を始めるのです。これが記紀に記載された出雲での素戔嗚命（スサノオ）の八俣大蛇（ヤマタノオロチ）退治であり、大国主命の国譲り事件で、少し下って九州での饒速日命（ニギハヤヒ）の遠賀湯への天神降臨となり、その蛇尾に邇邇芸命（ニニギ）の糸島への天孫降臨があります。これら征服事件を記紀が特筆大書するのは、この南方系倭人社会の上に君臨する北方系騎馬民族王権の構造こそ、この列島の国是とするところにあります。

つまりこの列島の基本的矛盾は南方系倭王権と北方系騎馬民族王権の確執で、私はそれを「日本古代史の南船北馬」と呼び、結果として北方系王権が南方系倭人社会に君臨するに至ったこの列島の国家構造をグラフト（接ぎ木）国家と呼んで来ました。

こうして南方系倭人集団の活動に始まったこの列島の国家活動は、ついに北方系王権の支配するところとなり、出雲王朝は廃れ九州王朝・倭国の時代が来ますが、七〇年代に始まった古田武彦の九州王朝・倭国説は、この北方王権が支配することとなった天孫降臨以後の展開にすぎず、古田武彦はそれを前一世紀に始まり八世紀初頭の日本国の成立まで、列島の盟主は倭国にあったとしてきました。

九〇年代に入って大芝英雄の豊前王朝の発見によって、記紀の説く神武東征による大和征服とは、博多湾岸からお隣りの遠賀川上流の筑豊への征服譚に、瀬戸内海行路を継ぎ足し近畿への征服譚としたもので、大和朝廷の前身としての豊前王朝が浮上しました。つまり倭国は天孫降臨に始まる筑紫王朝と神武東征に始まる豊前

王朝の橿原国家であることが解ったのです。この橿原国家の内部葛藤が磐井の乱で、これに勝利した継体天皇から豊前王朝が倭国の盟主となったことによって、磐井の乱は特筆大書されたのは大和朝廷の権力層の出自を語るものです。

《倭国から日本国へ》

しかし、記紀が倭国を大和朝廷のかつてのまたの名としたのはこのことによるのですが、倭国が東の近畿に移り大和朝廷となったことについては知らぬふりをしたのは、大和朝廷の隠さねばならぬ秘密だったからです。それは倭国が六六三年の百濟復興のために韓半島に出兵し、唐と新羅に白村江に敗れ、翌六六四年から六七二年の八年間、倭国は唐の占領下に入ったことによります。太宰府の筑紫都督府跡が唐の占領政府跡であるのは、この占領によって即位が不可能となった百濟系天智が九州を見限り、近畿に逃げ近江に臨時政権を樹立したことによって明らかです。しかしその唐も吐蕃の反乱拡大のため倭国及び韓半島から勢力を引きあげ、東アジア政策の見直しを迫られます。この唐不在の千載一遇の空白を狙って、新羅の後援を受け、天武が近江朝を征服したのがいわゆる壬申の乱で、天武はおそらく倭の五王が君臨した筑紫王朝の衣鉢を継ぐ者で、天武は近畿大和の物部系大氏に迎えられ大和飛鳥に入ったことに大和朝廷は始まります。

記紀が磐井の「乱」と呼び、壬申の「乱」と呼ぶのは、豊前王朝の天智を正統とする立場表明で、筑紫王朝の磐井や天武を「賊」とするものです。このことは天武に始まった大和朝廷が、七二〇年に『日本書紀』が結果したとき、それは天武ではなく天智を顕彰するねじれをもって成立したことを語るのです。このねじれは、六八六年の天武崩御直後の朱鳥の変（大津皇子の変）に始まる近江朝残臣のクーデターなしには語ることはできないのです。正史『日本書紀』はそれを小さな出来事に記述し、皇統の流れは自然のごとく天武から持統を経て文武に至る流

れを描き出しました。

このように日本古代史は、通説がするような大和中心に展開した「万世一系の天皇史」の流れにあるのではなく、東アジアの民族移動史における南船北馬のしのぎを削る熾烈な興亡史として、この列島で多元的に形成を見てきました。そして北方系王権の確立以後も、複雑な内部葛藤をもつほかないのは、支配層が南方系倭人社会の上に浮草状にあったからで、かつての南方系旧支配層との妥協を取るか、まったくの征服型を取るかで、接ぎ木国家の倭人社会は鳴動するほかなかったのです。

《正史とバイブルの記述方法》

東アジアの民族移動史における南船北馬の熾烈な興亡史であった日本古代史は、正史『日本書紀』において悠久の大和における天皇中心の歴史として成立を見たのです。この架空現実としてそそり立つ大和幻想の中に真実を埋葬した正史記述が、ほかならぬ日本国の共同幻想なのです。この新しい共同幻想が掴めぬため、七〇一年の日本国成立から七二〇年の正史『日本書紀』の間に天皇行幸歌が影を潜めたのは、前代の史書や文書がことごとく禁書の憂き目の遭うのを見て、宮廷歌人は歌う術を知らなかったのです。こうして我々はかつてあった歴史事実と逆立ちした記紀を、この列島の歴史を語るものとして一三〇〇年にわたり尊重してきたのです。しかし、こうした歴史改竄は『日本書紀』に限らず、遠い昔から正史が常に画策するところであったことは、これまでの正史の証言するところです。

中国二十四史の初めにある司馬遷の『史記』は、夏に滅ばされた伝説の蚩尤について記しましたが、夏や殷に始まる黄河文明に匹敵するものとしてあった長江文明を、黄河中心の中原史観の影に隠し、その多くを取り込んだことは、その後の正史の型を決定しました。同様に、朝鮮の『三国史記』における百濟史の記述は、先に滅んだ佛流百濟史を取り込んだ温祚百濟史となって

いることも近年明らかにされました。つまり正史は敗者の栄光の歴史一切を我が物とし、自らを言祝ぐものとしてあったのです。

それは史書に止まらず、バイブルにおいても同じで、『新約聖書』はユダヤ教に止めを刺す意図をもって編纂されたのですが、それはユダヤ民族を獲得できなかったが、それ以上のヨーロッパ世界を獲得したのです。それは史的イエスを復活を通して神イエスに変貌させる中で、ヨーロッパ世界にローマ・カトリック教会がそそり立たせたのです。戦後発見を見た「死海文書」の研究は、それを「神の降臨はなかったが、教会の降臨があった」ことを証言しており、イエスの兄弟ベテロの原始キリスト教会を、パウロを中心とするものへ改変する中に大なる秘密をもっていたのです。それは天武の大和朝廷創業の業績を一切隠し、天智を日本国の始祖とする『日本書紀』の構造となんと似ていることでしょう。『新約聖書』が特筆大書する殉教者パウロの衣の下に、かつてキリスト教弾圧者であったパウロことサウロの宗教支配の野心を見ずに、『新約聖書』を語ることはできないのです。それは後のローマ教会の支配に道をつけるものでした。

『日本書紀』は、それまで列島各地で多元的に展開した東アジア民族移動史としての列島における南船北馬の興亡史を、悠久の大和中心の万世一系の天皇史へと逆立ちさせ編成したものです。この成立によって七〇一年に誕生したばかりにすぎない日本国は、現人神の闊歩する悠久の大和の神国に変貌し、それへの帰依を第一とする大和魂が臣民の道となる、支配者のご都合史の基本は確立したのです。それは過去の歴史の一切を日本国が篡奪することによって、現在及び未来を当然のごとく篡奪する、列島支配のための巧妙な日本教としての天皇制支配の原理書として成立を見たのです。大和朝廷がその後、事あるごとに『日本書紀』の講読を繰り返し実行し、廷臣を洗脳する中に日本国は基礎をもつ

ことになります。この教育成果は、早くも遣唐使が中国で日本国の由来を尋ねられ、正史の立場からする答えをもってしたため、蓄積された列島認識をもつ中国から、その態度を不信とする記述が『旧唐書』にあることに見ることができます。こうしてかつての列島の歴史認識から隔絶した袋状の逆立ちした大和中心の歴史観に、全く取り込まれたところに、近代日本に至る列島大衆の総敗北は結果したのです。

そこでは、六七二年の壬申の乱後の天武の飛鳥浄御原宮入りに、大和朝廷がたかだか始まったにすぎないのを、遠い昔の神武の豊前東征を大和遠征に造作する中に、天武の大和朝廷の創業の意味はすっかり埋没しているのです。そして七〇一年に、名実ともに誕生した日本国の基礎は、六六一年の天智称制に始まるとするのが、この正史『日本書紀』の奥義の要なのです。その意味は、六六〇年の百済滅亡の翌六六一年に、早くも天智はこの列島において百済復興を陣頭指揮したとするものです。この辛酉年を起年として、讖緯思想に基づいて神武東征がセットされたのです。

その天智はおそらく百済の多羅出身と思われるのは、『日本書紀』はタラシ系征服史観をもって、九州征伐(景行天皇→オオタラシ)、三韓征伐(神功皇后→オキナガタラシ)、蘇我征伐(天智天皇→母・斉明はイカシタラシ)を記していることに明らかで、兼川晋は百済を旧多羅と解いています。というのは彼らはすでに列島に「新しい多羅」である豊を作っていたからで、タラ↓タヤ↓トヨとそれは語音変化したものであったのです。さの最後のタラシ系征服史観に点睛を入れたものが、天武体制から天智を戴く藤原体制への転換を成し遂げた藤原不比等(父・鎌足↓カマタラシと天皇を擬す)の主導した六八六年の朱鳥の変に始まった事件で、物部氏から藤原氏への第二の国譲り事件が隠されているのです。この多年にわたる南船北馬に抗争に決着をつけた朱鳥元年の意味を、『日本書紀』は大阪哲学学校通信 No.29

「蛇と犬が相交んだが、しばらくしてともに死んだ」と忍びやかな寓意をもってしました。その最後の光景は『万葉集』は玉藻刈りや藤波の歌として残されており、その大虐殺は天武崩御直後の六八六年の朱鳥の変(大津皇子の変)に始まり、七一六年の出雲大社の再建をもって幕は引かれたのです。この決着を踏まえて四年後の七二〇年に『日本書紀』は完成を見たのですが、この全国的に展開したホロコーストを、歴史家はまったく見ないのです。ここに現代に至るこの列島の最大の歴史の意味喪失が生まれたのです。

《寓意と共同幻想》

この正史『日本書紀』によって全く隠された天武体制からの大和朝廷の転換は、この国の「もうひとつ皇統」である南方系倭王権の歴史喪失とも云えるもので、その後の正史を踏まえた皇国史観の中で、七世紀後半まで歴然としてあった南船北馬の興亡を見失うもので、戦後史学も例外ではなかったのは、それがこの列島の古代史を「神話」と「歴史」に分け、たかだか「歴史」を第十代崇神、第十五代応神天皇以後とする天皇史観に限って論じているからです。そこでは、「葵は枯れて菊は盛りとなった」と言えば通じるものが、先の朱鳥の変における「蛇や犬」の死に象徴されるものが何であったかさえ、現在では歴史家が話題にすることもありません。そこでは公然と「鬼は外、福は内」の差別言葉さえ問われることなく、この列島社会を今も席卷しているのです。

幻想史学は、『日本書紀』の記述の影にまったくかき消された、この列島の「失われた共同幻想」を、その幻想表出から復元するものです。このとき、蛇が象徴するものが八咫大蛇に繋がる出雲王朝の大国主命の末裔なら、犬はあの金印国家の委奴国(狗国)の流れを示唆しており、それらはいずれも南方系倭王権(呉越の王権)の流れにあったのです。つまり天武の後継者・大津皇子は、この犬系の天武と蛇系の大田皇后の

血を引く者であったので、それを『日本書紀』は「蛇と犬が相交んだ」が、今や朱に染まり死鳥として飛び立ったというのが、天武崩御の年に『日本書紀』が朱鳥年号を置いた意味なのです。それに止まらず、この正史はその後、全国的展開をもった天武狩り(藤氏狩り)と物部狩り(玉藻刈り)を頬被りし、その天武の姓である藤を奪い、自らを藤氏の中心(原)の意味をもつ藤原氏を成立させたのです。この意味はレジメに用意した大和飛鳥の地上絵が、天武が藤氏の中心に立ったことを記念した都である藤原京を心臓部において、楯と剣をもった巨人としての物部氏がそれを護衛する天武・物部体制を見事にしています。この巨人はその大和飛鳥に散らばる春日神社を結んでできたものですが、それは春日信仰の主宰者こそ三輪山のある大倭(オオヤマト)の中心にある今の多神社にあった物部氏系の大氏であったのです。その多神社に、七十二体の木像が御神体として鎮魂されているのですが、それはおそらく朱鳥の変の大氏一族の犠牲者なのです。この多神社の主宰する春日信仰は三輪山と太陽信仰を合体したもので、その日の出線の東端に伊勢斎宮(滝原宮)があることは、伊勢神宮が春日信仰を盗み皇大神宮として独立させ創出させたもので、このことは、その後、春日信仰のメッカとして奈良に春日大社が藤原氏によって創建されていく必然を語るもので、すべてかつての光栄あるものすべてを盗んで天皇制は成立しているのです。このように、『日本書紀』の記述は、勝利によってようやく獲得したものを、かつてから自らのものであったがごとき記述法をもってしたのでした。

天智称制八年(六六八年)に中臣鎌子は死にますが、その場面の記述に、「天智天皇は東宮太皇弟(天武)を鎌足の家に遣わし、大織冠と大臣の位と共に、藤原の姓を授けた」とあります。これは天武によって死に至らされた天智と鎌足の子孫が、積年の恨みを晴らす六八六年以後の朱鳥の変によってやっと掴んだ勝利を、か

つてからあったものと天智の時代に繰り上げ記述したもので、あくまで天武は天智の指図を受ける下位にあり、その天武は鎌足に藤原の姓を捧げたと書いて溜飲を下げているのです。その藤原氏は藤氏の中心の意味をもつことに気づけば、これは天武系藤氏を殲滅させ奪ったことを、天武が捧げたと記録するものなのです。しかも鎌子を鎌足としたのはカマタラシと天皇を擬し造作したもののなのです。このように天皇制とは、現在の勝利を永続化させるために、他者の過去の栄光をすべて篡奪し、現在及び未来の君臨するために、遠い悠久の大和の昔から自らが君臨したごとき歴史記述した『日本書紀』の中にその誕生の秘密をもったのです。

こうして天武系藤氏の存在は藤原氏がそそり立つ中で、まったくその影を失いましたが、物部狩りは玉藻刈りという大和ことばにその痕跡を留め、物部氏から藤原氏への国譲りはその後、出雲大社の七度にわたる再建の中で再確認されるのはそれが、朱鳥の変後の日本国(大和朝廷)の国是の確認として国家的宗教行事としてあったことを語るものです。そのとき中臣神道の大祓の祝詞が持ち出されるのは、いかなるおぞましい虐殺であれ天皇の命令に従う限り、それは国家的な神聖な行為として赦されるとするもので、それは近代の対外侵略を合理化する思想として靖国神社の思想に引き継がれて行くのです。

《国文学解釈の無惨》

この大和朝廷の本質的な転換を『日本書紀』が隠す中で、大和中心の万世一系の天皇制史観が猥褻する中で、それを踏まえた解釈の中に国文学の現状があります。それが歴史学と同様にどんなに無惨なものであるかの例をいくつか上げておきたいと思います。

「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」という歌が記紀にあります。通説はこれを奇稻田姫と籠もるために素戔嗚命は幾重にも雲の垣を巡らしたとする奥ゆかしい歌としました。しかしサンカの間では、「八蜘蛛断ち

において目に余る婦女暴行が行われたので、八重垣である掟を作らねばならなかった」というのです。それは素戔鳴命による八俣大蛇退治による共同幻想の改定が、どんなにおぞましい殺戮の中で進行したかを語るものです。

またお伽話として流布した『竹取物語』の真実は、大和朝廷による竹斯(筑紫)盗り、九州王朝の国盗り物語の寓意で、かぐや姫が九州の藤王朝のラスト・プリンセスであったことは、かぐや姫に群がった「色好み五人」が文武天皇即位前年の六九六年の、褒賞者五人に重なるところに明らかで、彼らは次期天皇の文武へのお興入れを切り札に、かぐや姫に近づき三種の神器を手に入れるや豹変し、その高貴なる血を貰い受けようと群がったのです。この五年後、日本国が大宝年号を建元をできた理由は、大宝＝三種の神宝がやっとここに大和朝廷に入ったことを語るもので、大和朝廷が悠久の昔からなかったことを自ら告白するものです。しかしそれを失ったかぐや姫が月に昇天するのは、倭国同様にその死を象徴するのです。

これと反対に、勝者の藤原氏は「あおによし奈良の都は咲く花の匂うがごとく今盛りなり」と歌われ、この咲く花が藤であるのは、これに続く万葉歌が示しています。しかしその藤はかつての天武系藤の花ではなく、その姓を篡奪した藤原氏の盛りの花として歌われているのです。だから藤原氏の家伝は『藤氏家伝』なのです。

またなぜ山部赤人が柿本人麻呂より『古今和歌集』で上位にあるとされたかは、彼の「田子の浦ゆうち出て見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪は降りける」にあったのです。この不尽の歌が絶唱とされる所以は、それに先立つ長歌には「布士の高嶺を……渡る日の、影も隠るひ 照る月の光りも見えず、白雲も い行きはばかり」とあり、今や藤原氏の富士の山の前に、日(豊前王朝)は影ろい、月(筑紫王朝)も光りを失い、雲(出雲王朝)も這いつくばるばかりとなったと歌っていることによるのです。そこでは自然詠のなぞらえて大和歌の秩序構造を見事になぞった者はなかったからです。柿本人麻呂の死が日本国の誕生と前後してあるのは、彼は所詮、倭国の倭歌(やまとうた)の歌の聖にすぎないからで、和歌の古今の一線は山部赤人を待って倭国から日本国をなぞるように確立したからです。

つまり正史『日本書紀』によって過去の一切が篡奪されたため、天智を戴く藤原王朝は、過去の栄光の一切をいまや我が物とし、現在及び未来に君臨する道につけたのです。その代償が大衆の頭蓋の中からの「この列島に多元的に展開した東アジア民族移動に根をもつ歴史の根こそぎの追放」で、それに代わって「そそり立つ悠久の大和における万世一系の天皇制」の袋に我々は、ほぼ一三〇〇年にわたり根こそぎ閉じこめられてきたというわけです。(H16.5.2補正)

運動誌・研究誌

◆哲学学校の会員や参加者の中には、それぞれの関心からさまざまな市民運動や研究会に参加・運営をしておられる方がいます。そうした方々が、お書きになった文章や活動紹介を兼ねて出版物などを送ってくださいます。最近はそのようなものをいただきました。会員交流の一助としてご紹介いたします。(※各連絡先を知りたい方は哲学学校事務局までお問い合わせ下さい)

●『ニューズ・アソシエーティブ』第214号、第215号、経済研究会発行

「拉致問題とブッシュの関係」「下降に向かうアメリカ経済、調整期を迎える中国経済」ほか

●『季報・唯物論研究』第88号、『季報唯研』刊行会発行 座談会「現代アメリカの社会思想」

(宇仁宏幸、小澤卓也、木村倫幸、田畑稔、山口協、山本晴義)ほか

●道路公害から生活をまもる『みちしるべ』第29号、阪神間道路問題ネットワーク発行

「自己責任」(砂場徹…哲学学校会員)ほか

ある現象

上野山 定由（参加者）

頭のなかを
 酸欠にするか
 たたき壊すかすれば
 ビッグバン以来ひきずって来たものが
 シャボン玉のようにパッと消える
 橋のうえで
 あたりの景色を眺めている
 ビルの建てこんだ街に住んでいるので
 川筋の帯のような広がりが好きだ
 私が灰になってしまっても
 今日のように
 晴ればれとした良いお天気で
 そよ風が吹いておれば
 青空には白い雲がぼっかり浮かんでいて
 川面のさざ波は眩しく
 車はひっきりなしに橋を渡ってゆく

大阪哲学学校活動日誌（「通信」28号発行以降）

2004. 4.10. 「大阪哲学学校通信」第28号発行
 4.10. 討論会「なんでやるー『バカの壁』超308万部」
 ……………司会／問題提起・破偈否偈弥徹
 ……………報告・松尾猛省、高根英博
 4.25. 「古代史最前線—放射性炭素年代測定法の影響および“君が代”の源流」
 ……………講師・藤田友治
 5. 8. 「われわれはいかなる歴史的幻想の罠になるか？」……………講師・室伏志畔
 5.22. 「ソ連崩壊後のマルクス」(1)
 「マルクスと哲学の関係を読み直す」……………講師・田畑 稔
 6.12. 「ソ連崩壊後のマルクス」(2)
 「マルクス意識論を読み直す」……………講師・田畑 稔
 6.26. 「ハンガリーの近況から—歴史見直しの議論とルカーチ研究の現状など」
 ……………講師・丸山珪一
 7.10. 「〈第三世界〉のエスニシティ、ネイション、グローバリゼーション
 ～中央アメリカ諸国を例に」……………講師・小澤卓也

朗読劇「ザ・ヴァジャイナ・モノローグズ」 を観る

伊元 勇（会員）

■国際的高い評価を得ている評判のヒット作品で日本初公演。

1996年、オフ・ブロードウェイのウエストサイド・シアターで幕を開けた。以来、全米のみならず国外でも公演され、オビー賞を得るなど広く人気を博している。エンスラーは女性が自分の性器のことをどう考えているかを知りたくて、知人にインタビューを試みた。その結果に痛く感銘を受けたエンスラーは、さらにその枠を拡大、下は10代から上は70歳以上の女性200人以上にインタビューを施し、それを元に書き上げたのが、「ザ・ヴァジャイナ・モノローグズ」である。日本ではイヴ・エンスラー/[著]岸本佐知子/[訳]出版社：白水社から販売されている。

■題名が示すとおり、何人かの女性のインタ

ビューにもとづいて、身体の秘密の部分に関するいくつかの話から成り立つ。作者、イヴ・エンスラーの手腕によって、秘められたテーマを表に出すことで広範な人生ドラマが繰り広げられる。知性と誠実さと思いやりをとおして、エンスラーは世界的な傑作をつくり(25ヶ国語に翻訳され、35カ国で上演)、中でももっとも道徳的な作品としての評価を獲得している。

(いずれもNPOピースチューンhpより)

白水社<http://www.hakusuisha.co.jp/> のメールマガジンから偶然に知った、東京だけの何やら面白そうな劇が、偶然関東へ行く時と重なっており、観られないこともなさそうだ、とコンビニでチケットを買っていた。そして日蓮のお寺で靈氣研修旅行を終えた帰り、特急列車から



← Eve Ensler

先に東京仲間と別れ、宿へ寄る時間なく、そのままの旅行姿で駅近くの赤坂Vシアターへ寄った。

どこかで見たことのある女優3人(岡本佳保里、小野山千鶴、古田耕子)が登場、舞台にある椅子に腰掛け、スポットライトを浴びながら、一人ずつ交互に身振り手振りを交え、その朗読劇は始まった。

ためらいながら語り始める、若かりし頃の初デートでの、自分の身体への反応による失敗がトラウマとなり、結局処女のままだと年が70代女性のインタビュー談より始まった。おかしきも哀しい、そして人間としての尊厳も踏みにじられた悲劇を乗り越えて語る、女性の心と身体さまざま有り様が、モノローグとして綴られてゆく。途中日本にローカライズされた演出もあった。「……そこで古くからある言葉を復活させることにした。」!?「おま×こ！」という大声。すると即座に観客席からスタッフらしき複数の女性の「おま×こ！」の絶叫が響き、結局10回ほどの掛け合いがあった。なんとまあリアルな劇での良さである。女性はその言葉を一生口にしない人もおれば、口にすることでカタルシスを開放できる人もいるだろう。それを抑圧と認識できる女性もいるだろう。個人的には大きなハードルである人もいるかも知れないが、それ

が女性への開放・暴力阻止へつながる一歩になるのだろうか。結局60年代の性革命当時より本質はそれほど変わっていないのではないかと思われた。なるほど当時からすれば、今は特に日本ではヘアヌードさえ気にも留められないほどになっている。むしろこの朗読劇は、欧米の進んでいるとされる大人の女性の意識を反映したもののようで、イコール世界のスタンダードと錯覚あるいは見なしとされているかも知れない。女性性という私の視点からはむしろ、平和日本の若い女性の性体験のカジュアル化・ローティーン化という、外電にも紹介されるほどの世界的にも先鋭化した風俗が、キリスト教という縛りのないモデルとして、女性の根源に迫る一つの生態を示しているのではないかと思ったりする。性革命などという大上段の言挙げより、日本の女性の行動の方が、より力強く世界を革新していくような気がしてならない。(2004.7.20)



田畑 稔『マルクスと哲学』

—方法としてのマルクス再読』

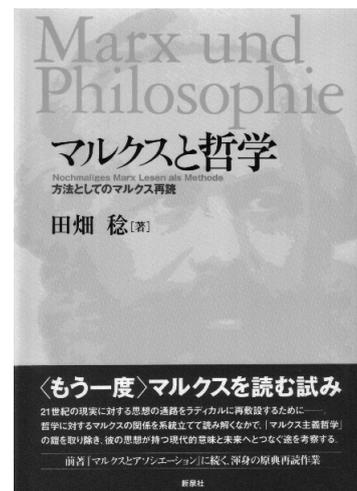
2004年5月 新泉社刊 (定価 4500円+税)

著者割引価格 (税込み4000円) にて

希望者に頒布中!!

申し込み・問い合わせは

催し受付または kihou-ha@xpost.plala.or.jp 迄



高橋準二 ラフ・スケッチ

義積 弘幸（会員）

「大阪哲学学校通信」第28号に、私は高橋準二氏の「道德感情と倫理学の課題—アダム・スミス『道德感情論』を手がかりに」（『科学知と人間理解』第五章）の二度目の補記を書いた。最後には「それ（百科全書派的知識の広さと〈愛知者〉の思索の深さ—義積）を思うとき、高橋氏の〈死〉が、いかに大きいかを痛感せざるを得ない。（2003.12.29）」と書き、高橋氏については、もう書くことはあるまいと思っていた。

しかし、「朝日新聞」（2004年5月12日付、日刊）の鹿児島大学助教授・川畑秀明氏（認知心理学）の「科学・直言」を読んで、三たび、高橋氏の登場をねがわなくてはならないことになる。まず、その過程を書いていこう。

川畑氏は、次のように述べている。

《一方で、哲学者たちを悩ませてきた問題がある。人はなぜ、美しいと思ひ、感動するのだろうか。美学という学問の中心テーマだ。

いまこの問題に「科学」が切り込もうとしている。人の豊かな感情が生まれる場所は脳。美を感じたときの脳を調べれば、活動ぶりがわかるのではないか。

機能的MRI（磁気共鳴断層撮影）と呼ばれる最新の脳画像解析法の登場が、これまで「科学」の入り込むすき間のなかった分野の研究に道をひらいた。

この手法で、私とロンドン大のゼキ教授のグループは、絵を観て「美しい」とか、「醜い」と感じたときの脳の活動を調べた。

その結果、美しいと判断するときには、前頭葉の下で目の後ろ側に位置する「眼窩前頭葉」という部分が活動し、醜いと判断するときには、左脳にある運動野と呼ばれる頭頂部が活動する

ことが示された。》

私は、この部分を読んだ時、美醜の判断も脳なのか。脳というのは、人間の精神生活を左右する、やはり重要な部分なのだと思うとともに、また、脳か、『唯脳論』（養老孟司）という本も出て、よく売れているようだが、こうなんでもかんでも〈脳〉ということになるとまいてしまうと思った。それは、私が精神障害者（躁うつ病患者）であるからかもしれないが……。

そして、この時、高橋氏の前掲書に思いがいったのだ。〈脳〉。この問題についても高橋氏は何か書いているだろうか。そんなことを思って……。

そして、前掲書を開けて、目次を見た。すると、やはり〈脳〉に関する章があった。「第三章 脳と心と唯物論—今日の脳研究に学びつつ」。これが、それである。

やっぱり、あった。私は自分の忘却を恥じた。それとともに、私が『季報 唯物論研究』82号に「脳と記憶と唯物論—故高橋準二氏に捧ぐ」という文章を書いていたこと、そして、第三章を紹介するため、できれば批評するため、赤い傍線、傍点、黄色の蛍光ペンを使ったり、書き込みまでしていたことを全く忘れていたことに気づき、自分のボケぶりに情けなくなったのであった。

さて、それでは「第三章」の内容ということになるのだが、それを書くには、この「通信」という場合は、あまりふさわしくないと思う（できれば『季報 唯研』に書きたい）。もっと決定的なことが書かれているので、そちらの方について述べておきたい。

一つは、この文章は、あくまで氏の仮説的文

言であるということである。

氏は、冒頭に次のように述べている。

《本章では、脳と心の間関係をテーマにしながら、このような問題意識の下に、筆者が現在唯物論のイメージとして考えているところを、仮説的な見解をも含めて述べてみたい。粗っぽいものであるが、30年前(プラハの春のころと思われる——義積)に「唯物論」とされていたものとどのように違っているか、読者の方にはご推察願えるものと思う。》

最後の〈仮説的結論〉の節でも《以上は手短かに要約した筆者の仮説的な見解である。心の能動的な働きを唯物論的な枠組みの中で理解するために、ここで提示した仮説が役立つであろうか、読者諸氏のご批判を待ちたい。》と述べている。そして、次は、所謂別稿を立てて書く必要のあるところについては、きちんとそう述べていることである。

例えば104ページ、6行目、《どうして数学的証明が正しさの証となるのかについては本稿の範囲を超えるので言及は控えておく》とか、同前9行目、《たとえば、〈質量〉の観念は力学の根本概念であるが、われわれに感覚できるのは〈重さ〉や〈加速しにくさ〉であることを思

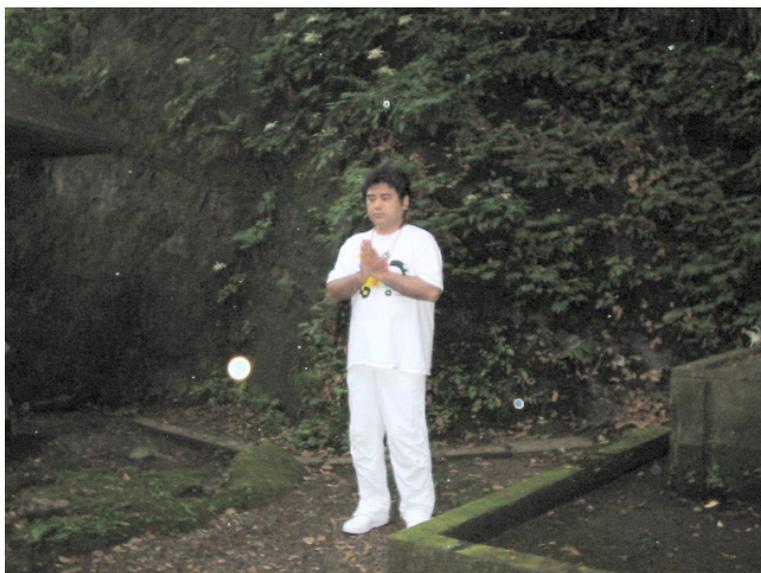
い出していただければよい。本稿の主題を離れるので詳しい議論は別の機会に回したい》と言っている。後、二つ、このような部分があるが、それは省略する。ここに引用した数学、力学にまで高橋氏が精通していたことを理解してもらえれば、よいのだから……。

しかし、最も〈哲学者〉(高橋氏は〈哲学〉)にも通じていたが、やはり〈科学の人〉であったことは前号で触れた)の耳に痛いのは、次のような部分であろう。

《とりたてて外部からの刺激を受けず、また筋肉を使ったりもしないで考えているという状態は、このような空回り状態のことであろう。およそ「哲学する」などという行為は空転の最たるものということになる。》(91頁、8行目)

《「存在」の概念と「価値」の概念が全く無関係であるかのように語る哲学的立場は、ここで基本的な間違いをしているのではないか。》(101頁、4行目)

このように、氏は〈哲学〉を批判できるところにも立場があった。やはり、氏は〈科学・哲学の人〉といえるだろう。まさに、高橋氏は、われわれにとって畏るべき存在であったことは間違いのないのである。(2004.5.29)



← 日蓮悟りの「練行の井戸」にて。写っていた白い玉は「玉響」^{たまゆら}だということだが、私の解釈は「？」です。(伊元)
【次 16-17 頁を参照】

お祓いセッション@清澄寺

伊元 勇（会員）

大阪哲学学校の催し物があるにもかかわらず、前日金曜日夜行バスで東京駅に向かい、朝東京のヨーガ・レイキ仲間と朝食（東京駅構内では回る寿司のお店が朝メニューで7時より営業している！）を共にしながら久闊を叙した。東京駅構内ながら（出発するところの）千葉方面に向かう京葉線ホームは、ほとんど有楽町に近い地下で、動く歩道を含めかなりの距離を移動しなければならず、知らない人はあわてるだろう。他の仲間とも落ち合い、指定特急で移動して、日蓮生誕の地の誕生寺を經由し、祖師堂がある清澄寺の研修所に宿泊した。

以前よりKA君のためにレイキ仲間と力を合わせて何事かしよう、という話があり具体的なことはいまいち不明ながら、うん、やろうやろうと軽く返事はしていたのだが、今回の研修ツアーで実際に呼ばれるまで迂闊にも私の頭にはほとんどなかった。そう言えば列車等で何か言っていたなあ、と思いつつ休憩していた部屋から用意された向かいの部屋へ入っていくと、すでにKA君は座布団を並べた上でお向けになって目を閉じている。今回の最重要ポジションおよび指揮を勤めるKOさんは、すでにKA君の頭すぐ後ろで待機している。いわゆる見える人のSAさんは部屋の隅へ離れて見守っている。唱名役のYA君はKA君の足元横から少し離れている。KIさんも見守っている。某有名な神職の人に古神道を習っているTUさんによって、部屋の四隅には盛り塩が置かれており、オーラソーマという調合された花のエッセンスの香りが漂う雰囲気の中で、そのセッションは始まった。

YA君のお題目「南無妙法蓮華経」の唱名が始

まる。最初に私はKOさんの指示によりKA君の両足を両手で掴む。KOさんはKA君の頭を両手で挟んで目を閉じマントラを唱え始めたようだ。ほどなく私はKOさんから、KA君の第二チャクラ（いわゆる丹田）に手を当てて所定の所作（マントラを唱え印を結ぶ）の指示を受ける。私はKA君の足元から居場所を変え、KA君のおなかの横で指示された所作を行う。右手をKA君の丹田に当てる。無言でマントラを唱える。練習はともかくこのような初めての経験に緊張したせいで、通常は長時間でも苦しくない、無理のない姿勢でなければならないはずのところだったが、多少悪かったようだが、必ずしもしんどいせいではなく、しばらくすると私の内に集中した熱気が私の身体を通じ、猛烈に汗をかかせ始めた。まるで滝のようだ。髪の毛からもいく筋かの汗を滴らせている。目に入りしみて痛い。ほかの人をうかがうと、全然汗をかいているようには見えず、忘我の様子である。汗をかきつつも私自身、少しトランス状態に入っていることは自覚していた。自覚出来るほどの瞑想状態と同じである。少しは思いを働かせ、その場の様子の記憶をしようとなめたようだ。見える人のSAさんは必死になって手や身体を動かし、いろいろと空中に印を切っている。今まで見ている彼女の行動から判断して、清められたために身体から出てきた、いわゆる邪気を必死に振り払っている、あるいは後戻りせぬよう何かを行っているように私には思われた。私は必死なせいか、あるいは単に鈍感なせいか、何も感じず、ただ目の前のことに没入していた。YA君の唱名は朗々と部屋に響き、時々調子を変え、早くなったり遅くなったり、あるいは大きく小さくなりながら、ほとんど途切れ

ることなく続いている。彼は整体に関わっているプロである。私自身も当時中野にあった彼の治療院で2回ほど診てもらったことがある。彼が日蓮宗の信者であるかどうかは私は知らないし、知ったとしても、こういう仲間うちでは特定の宗教自体が大きな意味を持つとも思えない。今回の日蓮宗総本山研修とは特に関係ないらしい。K Oさんは、自分からはほとんど言わないけれど、人から頼まれて自立的に癒しの実践をしているようである。やがてS Aさんが周囲を回りながら、関わっている私を含めた人たちの背中から、なんとというか、加持しているようにも思えた。この人がいなければ私もこの仲間に対するアプローチは違っていたであろうと思う。言わば参照基準を持っている、ということである。ヨーガの縁で知ってから5年ほどになるが、いろんな行動、言動あるいは他の(たとえば私の身体を見た高僧と呼ばれている人の態度)状況からして、何事か見えてるとしか思えない。信じられないけれど嘘とは思えない。彼女は特にスピリチュアルな家系ではないとも聞いた。東京中央郵便局に長年勤めあげ、最近早期退職している。本人はリストラで、と言いつつも、スピリチュアルなこの道を進むことを、以前よりある実体に憑憑されていたらしい。多少話してくれた内容からしても、通常の常識では測りようもなく、この私でさえ哲学学校の皆さんに対しても、コメントのしようもないところである。ただ個人的なことはともかく、彼女は思想ではなく実践の知を知っている、ということである。私はその実践と思想を如何に結び付けられるかが、この一見相矛盾した立場の私の弁明である。

ようやく一時間半ばかりで御成いは終わったようだ。長年本人の優柔不断の元になったであろう邪気はとりあえず大した抵抗もなく抜けたとのこと。根本的解決にはまだならないが、今後の本人の努力次第である、とのこと。その間、敏感で感じる事が出来るA Sさんは隣の部屋

でセッションが無事に終了するよう、ずっとお祈りをしていてくれたらしい。よき仲間はなかなか得がたいものであると、この縁(えにし)に感謝したい。パワフルな50歳前後のおばちゃんが多い中、男性陣がひ弱い印象は否めないが。

当事者の一人として加わっているので、本当には客観的判断というものはい出来ないだろうが、このような感じで述べることも一つのアプローチであろうと思われる。さいわい、思想でないことと真実でない、という倒立した信条は持ち合わせていないので、一見矛盾しているこの世の中のいろんなことに割と平気で首を突っ込んでいけそうである。ただし避けがたく相手にするも疲れる冷笑はこの世の習いとは思っていない。今回ご紹介した手当て療法の一つである、レイキはもともと霊氣であって日本発の世界的規模で広まった民間療法である。現在300万人程の資格者がいるとも言われているが、あながち嘘でもなさそうで、イギリスの一地方の電話帳にも通常の民間療法として大体載っているとのインタビューもあった。アメリカからの邦訳医学医療事典にも載っているのは私自身確かめ得た。諸外国では保険の範疇にも入っているケースもあるようである。

20世紀においての唯物論の業績は実に大したものであるし、今後もその役割は続くものと思われるが、実際には限界が露呈し始め、相対化されていくであろうと予感される。モノの正体は21世紀になっても相変わらず暴かれてはいない。大宇宙に照応した人体は小宇宙である、といわれる。その古くからある思想はいまだ干からびてはいないし、新しい知見でもって再解釈されると、その恩恵はまた計り知れない。今後も(スピリチュアルを含んだ)オルタナティブ(必ずしもアカデミズムと矛盾するわけではない)な世界、特に医学医療を紹介していきたい。(2004.7.19)

【15頁に写真あり】

